明治末期の男性語について
―― 夏目漱石の小説にみえる「絶対男性語」の考察 ――

寺　田　智　美

キーワード
男性語　明治末期　会話文　文末表現　夏目漱石

1.　はじめに

筆者は先に、夏目漱石の小説にみえる絶対女性語について考察した論文を発表した[1]。しかしその結果を女性語の特徴とするためには、同じ条件による男性語の分析結果との比較をしていくことが必要不可欠であると考える。

そこで本稿では前稿で作成したデータベースを用い、分析対象を絶対男性語[2]にしぼって該当する表現を抽出し、その特徴を明らかにしていきたいと思う。

2.　従来の男性語研究

分析に入る前に、日本語における男性語研究が従来どのように行われてきたかを概観しておく。

日本語の女性語研究が女房詞や遊女語といった位相語の観点から始められ、1980年代以降、さまざまな社会状況の影響も受けてより幅広い女性語研究へと発展していったことは、拙稿（1993）でも述べたところである。

しかし男性語そのものの研究は、必ずしも女性語のように盛んに研究されてきたわけではない。実際、「男性語」をキーワードにして文献を検索しても、抽出される論文は男女差や性差に関するものが多く[3]、男性語そのものを扱った文献はほとんどないといってもよい。

男性語・女性語という概念は、位相語の一種としてとらえられるべきもので

あると筆者は考えるが、位相語研究の先駆けである菊沢（1933）は日本語の位相語として9種[4]を挙げているものの、男性語・女性語という範疇は立てていない。この分野において男性語・女性語という範疇が明確に出されるのは、おそらく田中（1978）[5]が初めてではないかと思う。

男性語そのものを前面に出した文献としては、片桐ほか（1990）があるが、その研究対象は現代語に限られている。また、男性語を中心に扱った論文ではないが、飛田（1975）はその一部を割いて近代男性語の形成について述べている[6]。

今後、近代日本語の姿をとらえていくためにも、男性語成立の背景は明らかにしておく必要はあるだろう。

3. テキストと分析の対象

さて、本題に戻る。

前稿と重複するが、本稿で使用したテキストと分析の対象を簡単にまとめておく。詳細は前稿を参照されたい[7]。

3-1 使用テキスト

使用テキストは以下の10種である。

『吾輩は猫である』、『草枕』、『虞美人草』、『三四郎』、『それから』、『門』、『彼岸過迄』、『行人』、『道草』、『明暗』

底本は新潮文庫、データベース化するにあたり、CD-ROM版『明治の文豪』を使用した。

なお、扱ったテキストの中には、『行人』『道草』『明暗』のように大正期に入ってから発表された作品も含まれている。本稿および前稿のタイトルに付した「明治末期」という言葉とは矛盾するが、同一の作家の表現が大正期に入ったと同時に大幅に変化するとは考えにくく、またデータ量を増やすという意図もあって、特にこれらを他の明治期の作品と区別せずに同等に扱っていくことにした。

3-2　分析の対象

分析の対象は、使用テキストの会話文から抽出した29種の文末表現（＝〈表現Ａ〉とする）、およびその下位分類（バリエーション）603類（＝〈表現Ｂ〉とする）である。〈表現Ａ〉29種は以下のとおりであるが、〈表現Ｂ〉603類については前稿を参照されたい[8]。

〈表現Ａ〉
あ／い／え／か／かしら／かしらん／こと／さ／ぜ／ぞ／たい（方言）／ちゃ／っけ／て／てば／とも／な／なあ／ね／ねえ／の／のう／ばい（方言）／まい／めえ／もの／や／よ／わ

4.　分析

4-1　男性語の種類

以下、使用テキストにみられる男性語を抽出していくが、前稿の分析で行ったのと同様、男性語を

①　男性だけが使用し、女性は使用しない絶対男性語

②　女性よりも男性が多く使用する傾向のある相対男性語

の２種に分け、本稿では絶対男性語について考察していくことにする。

4-2　絶対男性語の抽出

4-2-1　〈表現Ａ〉による絶対男性語の抽出

まず〈表現Ａ〉に着目して、各表現が何人の人物によって合計何例使用されているかを調べ、【表Ⅰ〈表現Ａ〉の使用度数】(217頁参照。)[9]を作成した。各項目の説明は以下のとおりである。

表現Ａ　　…3-2で示した文末表現29種
総度数　　…使用したテキストに見られる総用例数
話手人数Ａ…〈表現Ａ〉を使用する男性または女性の異なり人数
使用度数Ａ…〈表現Ａ〉を使用する男性または女性の用例数

【表Ⅰ】によれば、女性の使用例が１例もない、絶対男性語として抽出された表現は、〈表現Ａ―ぞ／たい／ばい／めえ〉の４種である。しかし、〈たい／

ばい〉は用例数は共に11例ずつあるものの、話し手は『猫』に登場する九州唐津出身[10]の多々良三平１人、〈めえ〉は用例数が６例、話し手の数は３人で、いずれも前稿の抽出基準である「話し手５人以上、かつ用例数５例以上」[11]を下回っている。〈めえ〉はまだ他の作品の調査によって男性専用語として扱う可能性が残されているにしても、〈たい／ばい〉が方言であることは明らかであり、明治末期男性語の一般的特徴とはいいがたい[12]。

したがって〈表現Ａ〉による抽出結果としては、〈表現Ａ―ぞ〉のみを絶対男性語として扱うことにする。

4-2-2　〈表現Ｂ〉による絶対男性語の抽出

次に〈表現Ｂ〉603類の中から女性の使用例がみられないものだけを抜き出し、話し手の異なり数および用例数の多い順に並べたものが【表Ⅱ　男性だけが使用する文末表現】（218頁参照）である[13]。4-2-1ですでに絶対男性語として抽出されたものについては、網をかけて示した。各項目の説明は以下のとおり。

表現Ａ　…3-2で示した文末表現
表現Ｂ　…〈表現Ａ〉の下位分類
話手人数Ｂ…〈表現Ｂ〉を用いる話し手の異なり人数
使用度数Ｂ…〈表現Ｂ〉を使用する男性の用例数

【表Ⅱ】から絶対男性語を抽出するには、前稿でも指摘したとおり、ある基準を設定せねばならないが、ここでは前稿および本稿4-2-1と同様の基準、すなわち話し手５人以上、かつ用例数５例以上という基準を当てはめていくことにする。

以上のような手続きを経て、合計35類、4-2-1 ですでに抽出されている〈ぞ〉を除けば新たに34類が絶対男性語として抽出されたことになる。〈表現Ａ〉の分類によって整理して示そう。

■　〈表現Ａ〉による分析で、すでに抽出されていたもの１類
〈表現Ａ―ぞ〉→〈表現Ｂ―ぞ〉

■ 〈表現B〉による分析で、新たに抽出されたもの34類

〈表現A—あ〉 → 〈表現B—まさあ／らあ〉
〈表現A—い〉 → 〈表現B—のだい〉
〈表現A—か〉 → 〈表現B—じゃないですか／だろうか／てくれないか／てくれませんか／なのか／のか／もんか〉
〈表現A—さ〉 → 〈表現B—だとさ〉
〈表現A—ぜ〉 → 〈表現B—ぜ／だぜ／ですぜ〉
〈表現A—っけ〉 → 〈表現B—っけ〉
〈表現A—な〉 → 〈表現B—かな／がな／からな／さな／だがな／だからな／だな／だろうな／ですかな／ですからな／ですな／な（禁止）／のかな／ますかな／ますな／ましたな〉
〈表現A—なあ〉 → 〈表現B—だなあ〉
〈表現A—ね〉 → 〈表現B—もんかね〉
〈表現A—や〉 → 〈表現B—や〉

〈表現A〉の中で、男性の使用例しかみられなかった〈表現B〉を含むものは、〈表現A—あ／い／か／かしら／さ／ぜ／ぞ／たい／っけ／とも／な／なあ／ね／の／ばい／めえ／もの／や／よ〉の19種であった[14]が、先に述べた「話し手5人以上、用例5例以上」という基準をクリアーできたのは、このうちの10種ということになる。

男性専用の終助詞として、たとえば鈴木（1976）・小松（1988）・中野（1991）[15]は、〈い〉〈さ〉〈ぜ〉〈ぞ〉〈な（感動）〉〈なあ〉〈や〉を挙げている。これらはおそらく、男性専用語として一般的にも知られている終助詞であると思われるが、今回の調査ではそのすべてが抽出されたことになる。しかし、この中で完全に男性専用語と決定できるのは〈表現A—ぞ〉だけで、これ以外はバリエーション〈表現B〉によっては女性の使用例もみられ、〈表現A〉のレベルでは絶対男性語と認定できない結果となった。

以下、それぞれの使用状況を考察していく。

5. 各表現の考察

5-1 〈表現A〉による分析で絶対男性語として抽出されたもの

5-1-1 〈表現A—ぞ〉

○「君みたいに無暗に上流社会の悪口をいうと、早速社会主義者と間違えられるぞ。」 [明暗97：津田由雄→小林][16]

○「心を何処に置こうぞ。」 [猫322：迷亭の伯父→迷亭]

○「今の様に腕白じゃ、御母さんも構って呉れないぞ。」 [彼岸過迄190：須永父→須永市蔵]

〈ぞ〉は、4-2-2でも述べたとおり、従来の先行文献でも男性専用語として位置づけられてきたが、今回の調査ではそのとおりの結果が出た。小松（1988）にもあるように、「大変はっきりした男性語」[17]ということができよう。しかし話し手人数７人、用例数16例というのは、漱石の作品に登場する男性の人数[18]を考えれば、もう少し数値が高くてもよさそうである。この数値の低さが何によるものであるのか、他の文末表現の使用状況もふまえて考察していく必要があるだろう。

また上に挙げた用例中、２例目の〈ぞ〉のみ反語的な用法であり、主張や判断を表す他の用法とは異なっている。本稿では「形」に注目した分析を行っているため意味や用法の違いまでは言及しないが、この違いの処理法については今後の重要な課題の一つとして挙げておきたい。

5-2 〈表現B〉による分析で絶対男性語として抽出されたもの

5-2-1 〈表現A—あ〉 ～〈表現B—まさあ／らあ〉～

○「その代り生存競争も烈しくなるから、内部は益不作法になりまさあ」 [虞美人草297：宗近一→宗近父]

○「あとの事は何れ東京へ出たら、逢った上で話を付けらあ。」 [門34：野中宗助→野中御米]

女性の場合、〈わ〉の代わりに〈あ〉を用いるのは、比較的高い年齢層の女性に限ると前稿で述べた[19]。男性の使用者は、

・〈まさあ〉の場合

［猫］迷亭・水島寒月、［草枕］職人、［虞美人草］宗近一、［道草］比田寅八

・〈らあ〉の場合

［猫］迷亭、苦沙弥先生、［草枕］職人、［虞美人草］宗近一、

［門］野中宗助、［道草］健三、［明暗］岡本、客

である。漱石の作品に登場する人物の年齢層は決して広くはないため、断定することはできないが、これらは少なくとも職人から知識階層まで、幅広い階層の男性に使われる表現であるということはできよう。

5-2-2　〈表現A—い〉　～〈表現B—のだい〉～

○「何故そんな事を訊くのだい。」　［道草59：健三→御住］

鈴木（1976）・中野（1991）は男性語として〈い〉を挙げている[20]。しかし今回の調査では〈表現A—い〉の中で男性の使用例しかなかった表現は、〈表現B—のだい〉の１類しかない。【表Ⅰ】により、〈い〉を12人の女性が合計75例用いていることを考えれば、〈い〉自体を男性語と言い切ることはできないと思われる。

5-2-3　〈表現A—か〉　～〈表現B—じゃないですか／だろうか／てくれないか／てくれませんか／なのか／のか／もんか〉～

○「好くない様ですって、君、一所に居るんじゃないですか」
［それから10：長井代助→門野］

○「もう来ているだろうか」　［行人22：岡田→岡田兼］

○「今度は少し危険いようだから、誰かに頼んでくれないか」
［道草89：長太郎→健三］

○「どうです里見さん、あなたの所へでも食客に置いてくれませんか」
［三四郎101：野々宮宗八→里見美禰子］

○「君から金を貰うのが矛盾なのか」　［明暗499：小林→津田由雄］

○「——小夜や、用があるから一寸出て御出、おい居ないのか」
［虞美人草346：井上孤堂→井上小夜子］

○「好んで誰が喧嘩なんかするもんか。」　［明暗358：津田由雄→小林］

〈表現A—か〉は、48人の女性が551例使用しているため、男性専用語と断

定することはできない。本稿では〈表現A—か〉の中から絶対男性語として6類の〈表現B〉を抽出することができたが、絶対女性語として抽出された〈表現B〉は、前稿の調査結果によれば一つもなかった[21]。

前稿【表Ⅱ】によると、女性が〈か〉を使用するのは全部で96類ある〈表現B〉のうち53類、その中で丁寧語や尊敬語、謙譲語が含まれていないのは〈か／じゃないか／だか／ではないか／まいか／ものか〉の6類だけである[22]。

このことから、女性が〈表現A—か〉を使用するのは丁寧語・尊敬語・謙譲語が付随している場合が多いといえるが、敬語表現の有無と性差の問題については他の表現も含め、別稿でとりあげたい。

5-2-4 〈表現A—さ〉 ～〈表現B—だとさ〉～

○「その時東風の返事が面白いじゃないか、日本人は清廉の君子ばかりだから到底駄目だと云ったんだとさ。」 [猫90：迷亭→苦沙弥先生]

小松（1988）は「明治東京語」の姿を知る手がかりとして『三四郎』をとりあげ、そこにみられる表現を分析して「『三四郎』では「サ」は男性語だったが、現代東京語では、「サ」の使用、不使用について、女性の場合、有意の差が出ないようである。しかし、男性の使用・不使用の比率に比べれば、不使用が多い。」[23]という結論を出している。確かに〈さ〉は『三四郎』に限っていえば本稿の調査でも男性の使用例しかみられなかったが、他の漱石の作品からは女性14人による57例の使用例を得ることができた[24]。

今回扱ったテキストの中から、〈表現A—さ〉の用例が男性55人・計651例得られたことを考えれば、〈表現A—さ 〉は漱石の作品においては、どちらかといえば男性語的性格の強い表現であったということはできても、男性語であったと断定することはできない。

5-2-5 〈表現A—ぜ〉 ～〈表現B—ぜ／だぜ／ですぜ〉～

○「あんまり美しく描くと、結婚の申込が多くなって困るぜ」 [三四郎170：広田先生→原口]

○「宅じゃ近頃御前が来ないので、みんな不思議がってるんだぜ。」

［行人291：長野の父→長野二郎］

○「奥さんこの猫は油断のならない相好ですぜ。」　［猫79：迷亭→苦沙弥妻］

〈ぜ〉は先行文献では男性的な表現として扱われてきているが、全186例中、女性の使用例が１例あるために、〈表現Ａ―ぜ〉としては絶対男性語として抽出されることはなかった。

○「そんならもう帰して貰いますぜ」　［行人35：下女→長野二郎］

しかし全186例中、女性の使用例が上記の１例しかないことから、〈表現Ａ―ぜ〉は小松（1988）でも述べられているとおり、「非常にはっきりした男性語である」[25]ということはできよう。

「例外的な使用例」がどのような場合に見られるのかについては非常に興味深い問題であるが、これは今後の課題として検討していきたい。

5-2-6　〈表現Ａ―っけ〉　～〈表現Ｂ―っけ〉～

○「御嬢さんが、どうとか、為た所で頭垢が飛んで、首が抜けそうになったっけ」
［草枕65：余→職人］

〈っけ〉を男性語として挙げている先行文献は、筆者が調べた範囲では見つけることができなかった。しかし〈表現Ａ―っけ〉全体でみれば、女性の使用例が１例あるとはいえ、男性の使用者７人、合計８例というのは、比較的高い数値であるということができると思う。他の作家の作品を調査する際、絶対男性語として位置づけられる可能性がある表現として注目しておきたい。

5-2-7　〈表現Ａ―な〉　～〈表現Ｂ―かな／がな／からな／さな／だからな／だがな／だな／だろうな／ですかな／ですからな／ですな／な（禁止）／のかな／ましたな／ますかな／ますな〉～

○「もう少し平気で休んでいられないものかな。」　［道草170：健三→御住］

○「帰り着くまで持てば好いがな」　［行人57：三沢→長野二郎］

○「滅多な事を云うと又この間の松みた様に頭ごなしに叱られるからな」
［虞美人草291：宗近一→宗近父］

○「そうさな」　[門72：野中宗助→野中御米]
○「ところがあのお継と来たら、又引き立たない事夥しいんだからな。」
[明暗182：岡本→津田延子]
○「もっと若い綺麗な人が、どんどん見舞に来て呉れると病気も早く癒るんだがな」　[明暗440：津田由雄→看護婦]
○「先祖の拵らえた因縁よりも、まだ自分の拵えた因縁で貰う方が貰い好い様だな」　[それから46：長井代助→長井梅子]
○「行っても見られないだろうな」　[三四郎56：野々宮宗八→小川三四郎]
○「御茶って、あの流儀のある茶ですかな」　[草枕54：余→志保田那美]
○「そう云う訳でもないでしょうが、博士になって置かんと将来非常に不利益ですからな」　[虞美人草345：浅井→井上孤堂]
○「平岡さんは思ったよりハイカラですな。」　[それから118：門野→長井代助]
○「何だ坂の途中で人を馬鹿にするな」　[虞美人草11：宗近一→甲野欽吾]
○「噫々女も気狂にして見なくっちゃ、本体は到底解らないのかな」
[行人105：長野一郎→長野二郎]
○「何ですな、御互に正月にはもう飽きましたな。」　[門158：坂井→野中宗助]
○「じゃ愈世界に類のない呑気生活の御話でも始めますかな」
[彼岸過迄26：森本→田川敬太郎]
○「するとまあただ御出入をさせて頂くという訳になりますな」
[道草35：吉田虎吉→健三]

中野（1991）は、女性が〈な〉を使用する場合、その使用範囲は男性に比べて限られていると述べている[26]。実際、前稿の調査で絶対女性語として抽出された〈表現A—な〉は、〈尊敬＋な（命令）〉１種だけであり、中野（1991）の結論を裏づける結果となった。今後は〈表現A—な〉の意味や、〈な〉の前に承接する語の違いによって使用状況がどう変化していくのか、個別に検討していく必要があると思われる。

5-2-8　〈表現A—なあ〉　～〈表現B—だなあ〉～

○「兄さんも余っ程呑気だなあ」　[それから71：長井代助→長井誠吾]

〈なあ〉を男性語として取り上げているのは小松（1988）である[27]。確かに【表Ⅰ】を見た限りでは、男性25人で50例使用しているのに対し、女性はわずか１例しか用例が得られていない。

○「困るなあ」　［草枕24：婆→源兵衛］

5-2-5の〈ぜ〉と同様、例外的な１例が見られるものの、傾向としては「非常にはっきりした男性語」の１つであるということはできると思う。

5-2-9　〈表現Ａ―ね〉　～〈表現Ｂ―もんかね〉～

○「あんなもの今ここに持ってるもんかね」
［彼岸過迄118：松本恒三→田口千代子］

〈表現Ａ―ね〉は〈表現Ａ―か〉と同様、非常に用例数の多かった表現であるが、話し手の数・用例数とも、数値をみた限りでは大きな男女差があるといえない点、〈表現Ａ―か〉とは異なっている。前稿の調査では絶対女性語として〈表現Ａ―ね〉を含むバリエーション〈表現Ｂ〉が６類抽出された[28]のに対し、今回の調査では〈もんかね〉１類しか抽出されていない。〈表現Ａ―ね〉は134類のバリエーションを設定したが、そのうち絶対男性語あるいは絶対女性語に該当したものが合わせて７類であったということは、〈表現Ａ―ね〉自体には男性的な要素も女性的な要素も絡んでいない、と説明できるのではないかと思う。今後は承接による性差があるかどうか、個々に検討していく必要がある。

5-2-10　〈表現Ａ―や〉　～〈表現Ｂ―や〉～

○「旅費は先生から借りる、外套は君から貰う、たった一人の妹は置いてき堀にする、世話はないや」　［明暗105：小林→津田由雄］

〈や〉は鈴木（1976）・小松（1988）・中野（1991）で男性語として挙げられている[29]が、本稿では女性の用例が２例見られたために、〈表現Ａ―や〉としては絶対男性語として抽出されなかった。しかし女性の使用例は、

○「富子や、富子や」　［猫112：金田鼻子→金田富子］
○「清や、清や」　［猫464：苦沙弥妻→お三］

のように、いずれも「呼びかけ」を表す間投助詞的用法に限られている。

形容詞や助動詞などの終止形に接続する、命令・勧誘や軽く言い放つ〈や〉がすべて男性の使用例であったことから、間投助詞的な用法の「呼びかけ」の〈や〉以外は絶対男性語としてよいと思う。

6. 絶対男性語と絶対女性語の表現数の比較

4-2-2で挙げた絶対男性語の表現数と、前稿で行った絶対女性語の表現数を【表Ⅲ　絶対男性語・絶対女性語の表現数の比較】（219頁参照）にまとめた[30]。

この表から、以下のようなことが読みとれる。

① まず〈表現A〉による分析では、絶対男性語も絶対女性語も抽出された〈表現A〉表現の数に差があるとは言い難いが、その〈表現A〉1種あたりの〈表現B〉の数は女性語の方がはるかに多い。

② 〈表現B〉による分析では、抽出された〈表現A〉の数は絶対男性語の方が絶対女性語よりも多いが、〈表現A〉1種あたりの〈表現B〉の数はやはり絶対女性語の方が多い。

③ 全体的にみれば男性語よりも女性語の方が、少ない〈表現A〉で多くのバリエーション〈表現B〉を形成する傾向にある。

この結果から、女性語における女性らしさは特定の文末表現に強く依存することで表現されるため、1種の〈表現A〉あたりの〈表現B〉の数が多くなっているのに対し、男性語における男性らしさは、女性のように特定の文末表現に依存するのではなく、選択できる表現の幅が女性よりも広いために、1種の〈表現A〉あたりの〈表現B〉の数が少なくなっていると説明することができると思う。

もっとも〈表現B〉については、〈表現B〉を設定するときの条件がまだ流動的であるため、この設定が妥当であるかどうかを検証していかねばならない。当然、今後の研究調査によっては数値を訂正していくこともありうる。

したがって、上に述べたことを最終的な結論とするわけにはいかないが、男性語と女性語の性質を説明する一つの仮説として挙げておきたい。

7. おわりに

前稿に引き続き、夏目漱石の作品を使用して絶対男性語の抽出を試みた。

前稿の結果から〈表現A—こと／わ〉を絶対女性語として、本稿の結果から〈表現A—ぞ〉を絶対男性語として抽出することができた。おそらく、これらは男らしさ・女らしさを強く内包している文末表現と言うことができるだろう。〈表現B〉まで調査範囲を広げればさらにいくつかの表現がそれぞれに加わっていくわけだが、それらを詳細に分析していくには、たとえば各〈表現A〉にどのような語が承接すると男性語的あるいは女性語的といえるのか、今回の調査でも複数箇所にみられた「例外的な用法」をどのように扱っていけばよいのか、意味や用法の違いをどのように処理すればよいのか、などの未解決の問題がまだ数多く残されている。

また、絶対男性語と絶対女性語として抽出された表現の数を比較した結果、男性語と女性語では表現のバリエーションの広げ方に違いがあるのではないかという可能性も示唆した。この可能性が正しいものであるかどうかは、〈表現B〉の設定基準が妥当であるかどうかも考慮に入れて考えていかねばならない。

これらの問題点は今度の課題とし、さらに研究を深めていきたいと思っている。

なお、前稿および本稿の結果はすべて夏目漱石によって書かれた文字資料の分析結果である。どの時代を扱うにせよ、言葉の使用状況を明らかにするためには文字資料だけでなく、他のさまざまなジャンルの資料を対象にせねばならないし、文字資料に限定するにしても複数の作家の作品を扱っていかねばならないことはいうまでもない。

したがって前稿および本稿で述べてきたことは、夏目漱石の文字資料という極めて限定された範囲内での分析結果であることを、最後に明記しておく。

注

(1) 拙稿（2000）。以下、本文・注ともに「前稿」と記す。

(2) 本堂（1970）は女性語に関する論文であるため、絶対女性語・相対女性語という用語しか用いていない（36頁）が、本稿ではこれに倣い、男性語についても絶対男性

語・相対男性語という用語を用いることにする。

(3) 性差研究としては、人称代名詞や文末詞・終助詞を中心としたものが大部分を占めているようである。【参考文献】欄にその一部を挙げた。

(4) 菊沢は「忌詞」「僧侶語」「商人語」「学者語」「通人語」「遊女語」「女房詞」「武士詞」「盗賊語」の9種を扱っている。

(5) 田中は位相語の研究として、田中（1999）も著している。

(6) 245頁、254頁。飛田は、男性の知識人の言葉が漢語と外来語を多用する書生言葉から形成されていった、と述べている。

(7) 前稿、169～171頁。

(8) 前稿、184～186頁、【表Ⅱ】。前稿では〈表現Ａ〉も〈表現Ｂ〉も「種」と数えたが、本稿より〈表現Ａ〉を「種」、〈表現Ｂ〉を「類」と数えていくこととする。また、前稿では〈表現Ｂ〉の数は「605種」であったが、本稿では「603類」に数値を訂正した。訂正箇所は注(9)にまとめて示す。

(9) 前稿【表Ⅰ】【表Ⅱ】は、その後の調査により、訂正箇所が見つかっている。【表Ⅰ】の訂正箇所については本稿【表Ⅰ】*印を付して示した。前稿【表Ⅱ】の訂正箇所については、表現Ａ／表現Ｂ／話手性別／話手人数Ｂ／使用度数Ｂ／総度数の順で、以下に示す。*印は訂正箇所である。

- か／か／男／*52／*381／*2503
- か／ましたか／男／14／*31／（略）
- さ／さ／男／47／*283／（略）
- さ／さ／女／8／*16／（略）
- さ／のさ／男／*32／*126／（略）
- さ／名詞＋さ／男／*38／*207／（略）
- さ／名詞＋さ／女／3／*8／（略）
- ちゃ／ちゃ／男／17／*21／（略）
- ＜削除スル＞ちゃ／ちゃ／男／1／1／（略）
- ＜削除スル＞な／じゃなかろう／男／1／1／（略）
- な／じゃなかろうな／男／*2／*2／（略）
- ね／だがね／男／23／*54／*2727
- ＜表現Ｂ訂正＞もの／でござんす*もの／女／1／1／（略）
- よ／よ／男／55／*490／*2196
- よ／名詞＋よ／女／23／*167／（略）

(10) 中島（1990）、78頁。

(11) 前稿、172頁。

(12) 参考までに用例を挙げておく。

〈表現Ａ―たい〉

○「そうかも知れませんたい。」　［猫173：多々良三平→苦沙弥妻］

○「実は御気の毒と思うたですたい。」　［猫466：多々良三平→水島寒月］

〈表現Ａ―ばい〉

○「奥さん、先生のごと勉強しなさると毒ですばい。」

［猫171：多々良三平→苦沙弥妻］

○「胃病が癒りますばい」　　［猫469：多々良三平→苦沙弥先生］

(13) 前稿【表Ⅱ】の集計結果による。

(14) 前稿【表Ⅱ】の集計結果による。前稿と同様、話し手が１名のものはあらかじめ数に含めていない。

(15) それぞれ60頁、95頁、44頁。

(16) 作品名の後の数字は、新潮文庫のページ数を示す。下線は寺田が付した。

(17) 小松（1988）、98頁。

(18) 133人。前稿170頁。

(19) 前稿181頁の注(12)。

(20) それぞれ65頁、44頁。

(21) 前稿173頁。詳細は注(28)参照。ただし、抽出基準を満たしていないものはいくつかある。

(22) 前稿184頁。

(23) 小松（1988）、98頁。

(24) 〈表現Ａ―さ〉を使用していたのは以下の人物である。

【猫】金田富子、苦沙弥妻、雪江、【虞美人草】甲野藤尾、甲野母、【それから】長井梅子、【門】野中御米、佐伯叔母、【彼岸過迄】田口千代子、【行人】長野の母、【道草】比田夏、【明暗】藤井朝、津田延子、岡本住

(25) 小松（1988）、98頁。

(26) 中野（1991）、44頁。中野は「下さいな」のような、命令文に下接する用法に限って、女性の使用例が見られることを示唆している。

(27) 小松（1988）、95頁。

(28) 前稿173頁。詳細は前稿注(28)参照。

(29) それぞれ65頁、95頁、44頁。

(30) 前稿で絶対女性語として抽出されたのは、〈表現Ａ〉にのみ着目すると〈表現Ａ―こと／わ〉の２種である。それぞれの具体的なバリエーション〈表現Ｂ〉については、前稿174～176頁を参照されたい。また、〈表現Ｂ〉まで範囲を広げると、

〈表現Ａ―こと〉→〈表現Ｂ―こと／だこと〉
〈表現Ａ―わ〉→〈表現Ｂ―わ／ですわ／だわ／ますわ／ませんわ／じゃないわ〉
〈表現Ａ―て〉→〈表現Ｂ―て／なくって／尊敬＋て／なすって／お＋になって〉
〈表現Ａ―な〉→〈表現Ｂ―尊敬＋な（命令）〉
〈表現Ａ―ね〉→〈表現Ｂ―のね／わね／ようね／尊敬＋のね／なのね／だわね〉
〈表現Ａ―の〉→〈表現Ｂ―なの？／なの／お＋なの？／なすったの？／じゃないの／なさるの？〉
〈表現Ａ―よ〉→〈表現Ｂ―てよ／なのよ／じゃないのよ／尊敬＋よ（命令）／なさいよ（命令）／わよ／尊敬＋てよ〉

が抽出された。

【参考文献】

片桐須美子・小林美恵子・韓先熙・丸山和歌子・遠藤織枝（1990）
「共同研究　男性の話しことば―「女性の話しことば」と比較して」ことば 11（現

代日本語研究会）
菊沢季生（1933）『国語科学講座Ⅲ　国語位相論』明治書院
小松寿雄（1988）「東京語における男女差の形成―終助詞を中心として」国語と国文学65-11
鈴木英夫（1976）「現代日本語における終助詞のはたらきとその相互承接について」国語と国文学53-11
田中章夫（1978）『国語語彙論』明治書院
――――（1999）『日本語の位相と位相差』明治書院
寺田智美（1993）「日本における女性語研究史」日本語学12-6、明治書院
――――（2000）「明治末期の女性語について～夏目漱石の小説にみえる「絶対女性語」の考察」紀要13、早稲田大学日本語研究教育センター
中島国彦（1990）「漱石作中人物事典」、『夏目漱石事典』（三好行雄編・別冊国文学No.39）、学燈社
中野伸彦（1991）「江戸語における終助詞の男女差―女性による「な」の使用について」国語と国文学68-4
飛田良文（1975）「現代日本語の形成」『新・日本語講座　第4巻　日本語の歴史』汐文社
本堂　寛（1970）「文頭表現・文末表現に示される女性語意識―主として北奥方言について」国語学研究10

【表Ⅰ　<表現A>の使用度数】

表現A	総度数	男性		女性	
		話手人数 A	使用度数 A	話手人数 A	使用度数 A
あ	91	22	86	5	5
い	678	46	603	12	75
え	4	1	1	2	3
か	*2503	93	*1952	48	551
かしら	38	14	22	10	16
かしらん	11	8	10	1	1
こと	47	0	0	21	47
さ	708	55	651	14	57
ぜ	186	38	185	1	1
ぞ	16	7	16	0	0
たい	11	1	11	0	0
ちゃ	47	20	24	11	23
っけ	9	7	8	1	1
て	148	2	2	25	146
てば	1	0	0	1	1
とも	24	8	11	10	13
な	710	68	674	19	36
なあ	51	25	50	1	1
ね	*2727	89	*1984	51	743
ねえ	39	7	9	12	30
の	464	12	35	36	429
のう	9	2	7	1	2
ばい	11	1	11	0	0
まい	60	27	51	8	9
めえ	6	3	6	0	0
もの	203	22	60	29	143
や	34	16	32	2	2
よ	*2196	80	*1224	53	*972
わ	434	0	0	30	434
(合計)	*11466		*7725		*3741

【表Ⅱ　男性だけが使用する文末表現】

表現A	表現B	話手人数B	使用度数B
か	のか	26	121
な	かな	24	88
な	だな	22	105
な	ですな	22	63
ぜ	ぜ	21	84
ぜ	だぜ	15	62
な	だからな	15	30
や	や	14	27
ぜ	ですぜ	12	20
なあ	だなあ	12	20
か	もんか	11	15
な	のかな	11	14
な	からな	10	18
か	じゃないですか	10	12
な	な（禁止）	9	26
な	ますな	9	15
か	だろうか	9	10
あ	らあ	8	16
な	だがな	8	14
な	ですからな	8	14
さ	だとさ	8	13
い	のだい	8	12
な	さな	7	12
な	ましたな	7	10
な	ますかな	7	9
っけ	っけ	7	8
ぞ	ぞ	6	14
な	がな	6	12
か	てくれないか	6	10
か	てくれませんか	6	7
な	だろうな	6	7
あ	まさあ	5	11
か	なのか	5	8
な	ですかな	5	8
ね	もんかね	5	5
な	ませんな	4	8
ね	ますかね	4	6
か	じゃないのか	4	5
とも	とも	4	5
もの	もの	4	5
か	てくださいませんか	4	4
かしら	のかしら	4	4
さ	ださ	4	4
ぜ	ませんぜ	4	4
なあ	かなあ	4	4
ね	ましょうかね	4	4

絶対男性語 ↑

↓ 絶対男性語候補

表現A	表現B	話手人数B	使用度数B
めえ	めえ	3	6
な	じゃな	3	5
ぜ	ましたぜ	3	4
な	だあな	3	4
な	でしたな	3	4
なあ	のかなあ	3	4
か	なさいましたか	3	3
ぜ	だったぜ	3	3
な	なのかな	3	3
な	ものかな	3	3
よ	でしたよ	3	3
の	かの	2	6
な	がな（方言）	2	4
な	てくれるな（禁止）	2	4
な	ますからな	2	4
い	てくれるかい	2	3
な	っけな	2	3
あ	ざあ	2	2
か	お＋でしたか	2	2
か	てくださいますか	2	2
な	だったな	2	2
な	っけかな	2	2
な	でしょうな	2	2
な	なものかな	2	2
な	まいな	2	2
なあ	さなあ	2	2
なあ	ですなあ	2	2
なあ	ますなあ	2	2
ね	じゃありませんね	2	2
ね	じゃないね	2	2
ね	だかね	2	2
ね	だったからね	2	2
ね	だろうからね	2	2
ね	とかね	2	2
の	じゃの	2	2
の	ての	2	2
よ	だったよ	2	2

【表Ⅲ　絶対男性語・絶対女性語の表現数の比較】

	絶対男性語			絶対女性語		
	表現A（種）	表現B（類）	B／A	表現A（種）	表現B（類）	B／A
表現Aによる分析で抽出された表現数	1	3	3	2	28	14
表現Bによる分析で抽出された表現数	10	34	3.4	5	25	5
合計　（　）内はB／A	11	37	(3.4)	7	53	(7.6)